

令和5年度第7回社会教育委員の会議（三者合同会議）

令和6年1月31日（水）

午後1時30分開会

| | | | |
|------|---------------------|----------------------|------------|
| 開催日時 | 令和6年1月31日 | 開会13時30分 閉会15時30分 | |
| 場 所 | 小金井市民会館（萌え木ホール）A会議室 | | |
| 出席委員 | 社会教育委員の会議 | | 公民館運営審議会 |
| | 議 長 | 笹井 宏益 | 委 員 長 本川 交 |
| | 委 員 | 黒木 智道 | 委 員 浅野 正道 |
| | 委 員 | 伊藤 安寿華 | 委 員 橋本 利一 |
| | 委 員 | 榎本 敏 | 委 員 福井 高雄 |
| | 委 員 | 北澤 隆司 | 委 員 大坪 正直 |
| | 委 員 | 國分 ひろみ | 委 員 稲垣 芳樹 |
| | 委 員 | 森本 榮子 | 委 員 吉田 孝 |
| | 委 員 | 小林 浩 | 委 員 川原 美紀 |
| | 委 員 | 坂野 勝一 | |
| | 図書館協議会 | | |
| | 会 長 | 大串 夏身 | |
| | 委 員 | 関本 かおる | |
| | 委 員 | 小林 和美 | |
| | 委 員 | 伊東 哲 | |
| | 委 員 | 藤森 洋子 | |
| | 委 員 | 白井 俊明 | |
| | 委 員 | 岡田 治子 | |

| | | |
|----------------|------------------------------|--------------------------------|
| 説明のため出席した者の職氏名 | 生涯学習部長 梅原 啓太郎 生涯学習課長 三浦 真 | 公民館長 鈴木 遵矢 |
| 事務局 | 生涯学習係長 倉澤 淳子 | 図書館庶務係長 吉田 正友 公民館庶務係長 渡邊 健介 |
| 傍聴者人数 | 1人 | |

| 日程 | 議 題 | |
|----|-----|---|
| 第1 | 議 題 | <p>1 開会挨拶（生涯学習部長）</p> <p>2 講演「ポストコロナ社会における社会教育の役割について」 講師：小金井市社会教育委員の会議議長 笹井 宏益 氏</p> <p>3 ワークショップ・ディスカッション 「ポストコロナ社会における社会教育活動の具体化に向けて」</p> <p>4 まとめ</p> |

開会 午後1時30分

三浦生涯学習課長 皆さんこんにちは。本日は御多忙のところ、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

私、生涯学習課長の三浦と申します。本日の司会進行を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

ただいまから、社会教育委員、図書館協議会委員、公民館運営審議会委員による令和5年度三者合同会議を開会させていただきます。

初めに、生涯学習部長の梅原より、一言御挨拶を申し上げます。

梅原生涯学習部長 改めまして、皆さんこんにちは。生涯学習部長の梅原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

日頃より、社会教育委員、図書館協議会委員、公民館運営審議会委員の皆様には、本市の社会教育行政の発展及び生涯学習計画の推進のため御協議、御指導いただき、誠にありがとうございます。

この三者合同会議は、生涯学習社会実現のために、同じ生涯学習部門の主要会議体が共通の認識に立ち、それぞれの会議体の立場から、同じ方向性で推進していくことを目的とし、平成16年度から毎年、行われるようになったものでございます。

各委員の皆様は、異なるお立場から委員となられておりますが、他の会議の委員の方々と意見を交わされることで、また違った視点を得ることとなり、今後、会議の中に、さらに幅広い視点が加わるものと期待をしております。

本日の会議が有意義なものとなり、また、委員間の親睦をより深めることとなれば幸いです。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

三浦生涯学習課長 続きまして、本日の進行次第と資料の確認をさせていただきます。

この後、社会教育委員の会議の笹井議長より、「ポストコロナ社会における社会教育の役割について」と題しまして約1時間、御講演をいただく予定となっております。

その後、5分程度休憩を挟みまして、皆様には、グループごとに

進行役と発表の方を決めていただいて、「ポストコロナ社会における社会教育活動の具体化に向けて」をテーマに、30分を目安にディスカッションをお願いできればと思っております。

その後、各グループおおむね3分程度で発表の時間を設けますので、発表していただきまして、午後3時30分ぐらいには会議を終了したいと考えております。

なお、本日の会議録でございますが、次第の3番、ディスカッションの部分につきましては対象といたしません。講師による講演、グループの発表、講師の講評につきましては、会議録に掲載をさせていただきますので、あらかじめ御承知おきをお願いいたします。

次に、資料でございますが、お手元に、次第と本日の講演のレジюмеにつきましては、ございますでしょうか。大丈夫ですか。

それでは、ただいまから始めさせていただきますが、講演に先立ちまして、本日の講師である笹井宏益議長のプロフィールを、私のほうから御紹介させていただきます。

笹井議長は、1980年に文部省に入省されまして、生涯学習局地域学習活動推進室長等を経られ、1995年、北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授となりました。1998年からは国立教育政策研究所に移り、2012年から2016年まで同研究所生涯学習政策研究部長を務められました。

現在は、玉川大学学術研究所特任教授兼国立教育政策研究所フェローとして御活躍されております。

先生、肩書は間違っていないですか。

笹井議長 合っています。

三浦生涯学習課長 大丈夫ですか。すみません、ちょっと長いものですから、確認させていただきました。

また、本市の社会教育委員の会議議長のほか、東京都生涯学習審議会委員の会長、杉並区社会教育委員の議長、国分寺市の公民館運営審議会委員など、多くの自治体の委員を務めていらっしゃいます。

御専門は社会教育学、生涯学習政策論で、メディア社会が子供に及ぼす影響等について研究を重ねられていると伺っております。

主な著書といたしましては、『生涯学習のイノベーション』、『成人教育は社会を変える』、『メディアと生涯学習』などがございます。

以上、簡単でございますが、笹井先生のプロフィールとさせていただきます。

それでは、笹井先生、よろしくお願いいたします。

笹井議長

皆さんこんにちは。御紹介いただきました笹井です。

実は昨年秋から小金井の社会教育委員の会議の委員を拝命させていただいて、また、こういう場でお話しできるのを非常にうれしく思っています。

今日のテーマは、かなり大上段に構えたテーマで、「ポストコロナ社会における社会教育の役割について」ということで、これについて結構、今いろんな考え方とか方向性というのがあって、もちろん、そういう意味では研究途上といいたまうか、議論の途上なんですけれども、日頃、私が考えていることをちょっと皆さんに申し上げて、それで、皆さん方自身にもいろいろ考えていただいて、それを小金井のいろいろな社会教育行政に反映していただくということを目指して、大上段なテーマではあるんですが、考える素材というものを皆さんにちょっと提供できたらなと思ってお話しする次第であります。

お手元にハンドアウト、パワーポイントの資料をお配りしていると思いますが、これを見ていただくか、あるいはお手元の配付資料を見ていただくか、どちらかで進めていきたいと思っております。

まず、これも大上段の大きな話なんですけれども、ポストコロナ社会に対して文明論的な枠組みを提示しているんですけれども、今現在、コロナで大分世の中が変わった、あるいは変わらないという動きがあって、変わったし、これからずっと変わるよと言う人もいるし、いやいや変わらないと言う人もいるし、いろんなお立場があるのかなと思っております。

そういったポストコロナ、まだコロナ禍は終わってはいませんが、取りあえず一段落して、今もまた継続していると思っておりますが、一段落して、これから世の中はどうなっていくんだろうという、コロナ禍の経験を経て、世の中がどう変わるかというのが一つのトレンド、流れとなっていると思うんですね。

それより前に、実はいろんな社会の動向、動きがあって、一番大きなのはICT化、高度情報化と呼ばれているものですね。総務省に言わせると、高度情報通信ネットワーク化と言うそうなんですけ

れども、そういうトレンドがあつて、これは本来、前からずっとあつて、それで世の中は変わるよねということをよく言われてきたんですね。

特に世代間のICT化の受け止めというのは全然違って、本当に全然違っていると思います。私は昭和の人間だからそれなりの、若い人から言わせると古風な受け止め方をするんですけども、今の若い人は本当に、えーっという考え方だと思わざるを得ないような、ICTの活用とカリスクの受け止め方をしていますね。

そういうふうに我々の意識や、行動や、あるいは社会全体のいろんな構造とか機能、作用に対して、ICT化はすごく大きな影響を及ぼしていると思うんですが、要するに私が言いたいのは、コロナの問題がある、でも、それ以前からICT化、高度情報化の問題があつて、それが、社会教育も含めて、社会全体に大きな影響を及ぼしていますよねということをお願いしておきたいんですね。

それに先立って、教育というどうしても、日本人は学校教育を連想する、イメージするんですけども、それはやっぱり明治時代から、学校の整備、充実というものを通して国の近代化を図ってきたという経緯と無関係ではないというふうに思っています。

このスライドにありますように、明治政府の近代化のスローガン、大目標としては「富国強兵」で、国を富ませる、特に産業振興ですね。国を富ませて兵を強くする、軍事力の強化ですね。こういうことをしないと植民地化されちゃうということもあったと思いますが、今の基準でいいの悪いのというのは、なかなか難しいと思いますが、富国強兵政策です。

ところが、富国にしても、強兵にしても、資源のない国というのはかなりハンディキャップということもあつて、教育、人を育てるということに重点的に投資したわけですね。その際の教育投資、教育を重視していたものとして学校教育があつて、学校教育を津々浦々整備することによって、国を近代化しましょう、いい人をつくって富国強兵を進めていきましょう、こういうふうに考えたわけですね。

だから、当時、日本は遅れた国だったんですけども、今のイギリスとかアメリカじゃなくて、ほかの中国とか、いろいろ比べると、学校教育がよく整備されていたというのは、これは日本の特徴なんです。分校なり、山あいにも学校があり、尋常小学校、尋常中学

校といますけれども、そういうものがあって、できるだけ学校に行きましようということになっていたわけですね。

そういう中でも、学校に行けなかった人たちもいましたけれども、横並びのほかの国と比べると、かなりの就学率とか識字率、識字とは読み書きそろばんができる率という意味ですけども、だから、明治時代以降、非常に教育というものを重視してきた日本社会なんですね。

我々が、例えば、小学校に上がると言う。「うちの子、6歳だから小学校に上がるのよ」とかよく言いますけれども、上がるという言葉は、一段上のところに行くという意味合いが含まれているんですね、我々の意識の中に。だから、登校、下校、登る、下ると言いますけど、いまだに、学校とは登るところにある場所なので、下るとは、学校から下りてきて、また我々の家に戻るというようなこと。

だから、学校というのはある種の聖域だったわけですし、三歩下がって師の影踏まず、先生の影を踏まないというのは、学校の先生というのは聖職であり、師範だったわけですね。当時の学校は何とか師範学校とか東京師範学校で、師範というのは、武道をやっている人は分かると思いますけれども、物すごい偉い人なんですね。

ですから、学校教育を重視して、学校教育を通過した人たちがそれなりに社会的にリーダーになるような仕組みというのをつくっていった。これが実は学歴社会というものの原型になっているんですね。

福沢諭吉が『学問のすゝめ』という本で、天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず、これは四民平等というか、みんな平等なんですよというヨーロッパ型の人権思想ですね。天賦人権説と申しますけれども、そういうものを福沢が発表して、みんな平等なんだと。

でも、社会的な上下関係、師弟像というのはやっぱりあるわけだから、それは、学校で勉強した人が社会の上に行くべきだし、勉強しなかった人はそれほど社会の上に行けませんよと。

つまり、教育を受けたか受けないか、学んだか学ばないかが、社会的なある種のポジションの差異をつくるんですよということ福沢は言いたかった。だから皆さん学んでくださいというふうに言ったんですね。

その学びの形が学校を通過するということになって、結局、もともと明治時代の学校を重視していますから、その中で、学校を通過

することによって、ただ、出世できますよと、上昇志向が生まれてくるんですね。

それが、もっと分かりやすく言うと、いい会社に入るためにいい大学に入り、いい大学に入るためにいい高校に入り、いい高校に入るためにいい中学校にというふうに、学歴あるいは学校歴によって上昇志向を実現していくというような仕組みは、教育システムというよりも社会システムとしてできたわけですね。

だから、今の学校教育制度というのは、単に教育の序列性、順序性を示すだけじゃなくて、社会的にシステムとして、ある種の上昇志向、上昇を実現するための手だてとして教育がある、そういう一面もあるわけですよ。もちろん本人のキャリアとかも一応、関係していますけれども、社会学的に見ればそういう面も多分にあるということです。

そういった形で、学校教育が進められてきています。これについて、富国強兵とか、あるいは、追いつけ追い越せ型とか、あるいは、新しい価値(体系)や文化を習得する場という、古い封建的な文化、文明というのは、田舎に行けばまだありますけれども、そうじゃなくて、ヨーロッパの思想、ヨーロッパの学問、ヨーロッパの芸術みたいなものを、新しい体系として学校に利用しているということなんです。

何でもこういうことを言っているかというのと、要するに、上昇志向を求めてきたキャッチアップ型、目的を設定して、皆その目的を達成するために頑張りましょうというような思考様式、考え方というのは、明治時代から学校を通じてずっと養成というか、醸成されてきたわけですよ。

そのことによって日本は、戦争に行ってしまったこともありましたけれども、取りあえずは今現在も、繁栄してきたというんですけども、来年度、GDPがドイツに抜かれて、世界第3位に転落するという情報があるんですね。経済学者とかよく言っていますが、一部の経済学者は、いや、4位どころじゃないよ、8位まで転落するよというふうに言っている学者先生もいるんですね。

ドイツの人口は日本の半分だから、日本の半分の人口で日本より上、もっと高いGDPというか、生産的な価値を創出するということは、要するに、経済力は日本の2倍以上あるということを意味しているわけですね。

だから、これまでずっとキャッチアップ型で日本という国を、戦前は富国強兵でやってきて、戦後の復興も、目的設定をしてみんなで頑張ろうという、それが高度経済成長につながったということだと思いますけれども、そういうふうに来て、それが、特にバブル経済の崩壊以降、がくっとなってしまって、なかなかそこから抜け出せないというのが、今の状態ではないかなというふうに思っています。

そうすると、そういった行動様式とか思考様式を育ててきた学校教育というのがあるんですけども、学校教育も、壁にぶち当たっているというのは明らかなんですよね。

ちょっと細かいことは飛ばしますが、今現在、不登校、ひきこもり、それから、高校生の自殺者というのは、去年のデータが一番高くなっている。残念なことなんですけれども、どんどん上がっているんですよ。これはやっぱり学校教育なんかの問題があるということを示しているものだと思いますし、我々は今、説明するまでもないことで、学校教育がいろんな問題性、課題性を抱えているということは明らかだろうと思います。

そのときに、これから教育というものを、明治時代以降の教育イコール学校教育、ニアリーイコール学校教育で、社会教育は補完的なものだったというのが率直な考え方なんですけれども、社会教育は、要するに軽視されてきたわけですね。

そのときに、これまで日本の繁栄を築いてきた学校が、ちょっとつまづいてしまって、いろいろ課題を抱えている。学校教育がうまくいっていたというのは、明治時代、近代化の過程ですごくうまくいっていたんだけど、みんな上昇志向を持って、末は博士か大臣かじゃないけれども、そういうふうに思っていた時代にはすごく有用なものであったし、それは今でも少しはそうかもしれませんけれども、いろいろ問題が出てきてしまった。

そのときに、もう一つの教育の柱である、これまで社会教育というのは、ちょっと軽視されてきたというのは否めない事実だと思いますけれども、社会教育というのはどうあるべきなんだろうかということを考えざるを得ないわけですね。

30年ぐらい前から、学校、家庭、地域の連携、三鷹なんか一生懸命やっていますけれども、学校を、あるいは子供たちをもっと生き返らせると言っているいいかな、もっと豊かに成長させるために、も

っと地域の力、社会教育の力とタイアップしていこうじゃないかというのを全国各地でやるようになってきたわけですね。

国の文部科学省の中教審なんかも、今、地域学校協働活動といいますけれども、もっと学校教育と社会教育が、地域で行うようないろいろな学習活動、それから実践というものが、学校教育とタイアップして、協力し合ってやろうじゃないかというふうになってきた。

それは、学校教育そのものが力を失ってきつつある、一つの解決の方向かなと思うんですけれども、そういった状況の中で、ICT化がばーんと進んできたし、しかも、コロナで僕らの生活をもう一回見直さなきゃみたいな話になっている。

だから、社会教育というものは、もう一回、今の令和の時代に、ちゃんとそれが機能するということがとても大事になってきたときに、ICTの問題とか、あるいはポストコロナの問題で、いろいろな状況が変わってきてしまった。

その中で、いや応なしに我々はその中を生きていかなきゃいけないし、小金井の社会教育が充実するためにできるだけのことをしていかなければいけないと思うんですよ。

では、どういう方向で行けばいいのかなというのが、これから皆さんで考えましょうというのが今日の趣旨なんですけれども、その前に、学校教育そのものが問題性を抱えている。日本の場合は、特に近代化政策の下支えとして学校教育が位置づけられてきたというのは、よくも悪くもそういう特色を持っているんですけれども、全世界的に、日本も含めて、あるいは、これはメード・イン・ヨーロッパの考え方なんですけれども、生涯教育という考え方なんです。

生涯教育は何かというと、ここが一番大事なことなんです、学校で教わったことが、卒業後、何年かたてば役に立たなくなる、こういう思想なんです。もちろん全部じゃないです。二、三割かなと思いますけれども、学校で一応、1のことを教われれば、その何%か、何割かというのは、何年かたてばすごく陳腐化してきますよねと。では、どうすればいいか。その都度学ばないと、世の中の動きについていけないし、世の中をよくすることもできないからというのが生涯教育の思想なんです。

それは何か、どういうことかということ、生涯教育の思想というのは、世の中が変化し出したわけですよ。変な言い方なんですけど、すごいスピードで変化し出したわけですよ、1960年代に。変化し

なければ、学校で習ったことは一生涯役立つはずなんですね。変化しないから、それをうまく活用するというのも、社会が変わっていないから、そんなに難しいことではないですね。だから、学校で習ったことを、きちんと習って、大学まで行けば16年間なんですけれども、16年間学ぶと、しっかり身につけて、その後の仕事とか、いろんな家庭生活に生かしていけば、何も問題ない。

ところが、動くようになってきてしまって、学校で役立つというのを習ったことが、一生涯役立つという性格の知識、インテリジェンスと、いやいや、何度もリバイスしないと駄目なんですよという、変わってしまうから、変わったことにタイアップしていかないと駄目になってしまいますよねというインテリジェンスと、二通りに分かれている。ボーダーは曖昧ですけど、分かれている。

それは1980年代終わりの臨時教育審議会、臨教審というのがあって、当時、中曽根内閣のときにつくられて、あったんですけれども、そのときには、不易と流行ということが答申の中でも出てきて、何じゃこりゃと思うわけです。不易と流行って、分かりますか。変わらないものと変わるもの。

人間が生きていくために、持つべき知識やスキルや考え方、あるいは人間性とか、そういった変わらないものって、あるじゃないですか。それは学校でばっちり習いましょう。変わるものは、こう言っただけですけど、学校で習っても、また変わっちゃったら意味がないから、むしろ生涯にわたってその都度、学んでいったほうがずっといいですよというのが、生涯教育、生涯学習の考え方なんですね。

今日はそこまで詳しくお話することは避けますけれども、つまり、動いていない、静態的な、スタティックな社会の場合は、不易と流行の不易というものが重要な意味を持つんですね。普遍的な価値、いつの時代でもどこの場所へ行っても変わらない価値というのを持つ。それはむしろ若いときに集中的に基礎・基本を学んで、社会に出る。それは変わらないわけですから、その人の人生の土台をつくるわけです。

でも、動いているダイナミックな社会、動態的な社会の場合は、流行のほうも少し考えなきゃいけないということで、社会が求めている価値というものを学んでいかないと、すぐ遅れちゃいますよということになるんですね。そういうことによって、我々はそれをバ

バージョンアップと言っているんですけども、今の自分が持っている知識とか知性のレベルをバージョンアップすることが必要で、そうしていかないと社会から大分遅れます。だから、仕事のにもすごく難しくなっちゃいますよということなんです。

そうやってきたときに、学校を卒業してからもいろいろなことを学びましょうという話になると、いろんな学びが全部入るんです。学校を卒業してから、学校に再学習、再入学して学んでもいいんですけども、ほかにもいろんな学びの機会とか学びの場があるわけなんです。

それは何かというと、国際的な通説だと4類型と言われていまして、けれども、フォーマル教育、これは学校教育のことで、それから、ノンフォーマル教育、これは社会教育のことですね。皆さんから見て左側へ行って、インフォーマル学習、インフォーマルラーニング、これは個人でやる学習とか家庭教育、子育てみたいなことをインフォーマル学習というんですね。もう一つ、偶発的学習でインシデントラーニングというんですけども、偶発、偶然の学習、これは何かというと、ボランティアということなんです。

ボランティアというのは、いわゆる人助けなんですけれども、生涯学習、学び、つまり、その人を成長させるという意味、意義を持つんですよということで、これは大分皆さんに浸透してきて、通説的な見解になっているんですけど、こういった4類型があるんですね。

ですから、この4類型から、学校卒業後も必要に応じて、私は社会教育にコミットしているの、いや、私はボランティア活動をしていきます、人助けなんだけれども、いろんな社会が広がってすばらしい。いや、私は個人学習で、読書をやります、インターネットで検索をしますと、いろんなやり方があって、その都度、その人が取捨選択して、自分の生き方、あるいはキャリアというものをつくっていく必要があるということなんです。

このような生涯教育、社会教育とか学校教育の関係なんですけど、こういう形です。

社会の変化と生涯学習理念といいますか、そういう意味では、皆さん自分の興味・関心、自分が必要としていることを、さっきの4類型じゃないけど、それを自分の人生経路に合わせて、キャリアパスに合わせて、あるいはキャリアデザインに合わせて取捨選択して

って、自分の人生をつかっていってください、これが生涯学習の考え方ですね。

その中で、学校教育は何をするかという、先ほど申し上げたように、不易の部分やるんですけれども、そのバリエーション、それを考えると、初等中等教育と、これは要するに基礎・基本、リテラシーといいますけど、それをばっちり学んでいくということをミッションとする初等中等教育と、ちょっと見づらいかもしれない、高等教育ということで、社会人としての必要な教養とか、もちろん学校教育の最終段階としての高等教育の役割とあるんですが、それと併せて、大学生というのは社会に出る、社会人第一歩なんだから、第一歩を踏み出すような人たちなんだから、社会人として、社会人基礎力という考え方もありますけれども、そういうものを大学でばっちり学んでいく、そういうものも学んでいくというのがあるんですね。

あとは、先ほど申し上げた、学校教育以外の、要するに選択の幅というのが広がってきているということと、それから、そういう意味では、教育行政というものも、さっき言った、ボランティアを視野に入れた教育行政、あるいは、戻りますが、これですね。あるいは、子育てを視野に入れた教育、家庭教育とか、それから社会教育、あるいは学校教育も、先ほど申し上げたように、リテラシー、不易の部分を充実させるとか、そういうふうにして、いろんなところで教育行政も変わっていきやしませんよねというのが、今の時代に求められていることなんだと思います。

ちょっと見方を変えて、生涯教育の時代に、ある種の学びのスタイルといいますか、それはどういうものがあるんだろう。4類型からいろんな自分の選択を選びなさい、それは大いに分かった。では、もうちょっと見方を変えて、どういうものがあるんだろうというときに、3つあるんですよ。

1つは、一人で学ぶ、2番目は、仲間と一緒に学ぶ、もう一つ、3番目は、教育機関、学校とか研修で学ぶ、この3つのパターンがあるんですね。

一人で学ぶというのは、例えば本を読む。本もメディアですから、読書をするとか、インターネットで一人でにらめっこして、何か調べ物をするとか、あるいは非日常的な活動、修学旅行じゃないけど、旅行みたいなものに行って、自然を見て感動したり、いろんな情報

をゲットして面白いねとか、非日常的な活動という、一人で学ぶというスタイルがあります。

2番目は、ほかの仲間と一緒に学ぶというスタイルなんですね。これは実は2種類あって、グループ・サークル、仲間とグループやサークルをつくって学ぶというパターンと、誰だか知らないけど、誰だか知らないなんて怒られちゃうけど、不特定多数の人がみんな集まったところで、誰かの話を聞きながら学ぶとか、あるいは、ここは大事ですよ、講座・セミナーとかへ行くとどうしても講師の話に着目するので、そうじゃなくて、ほかの人が学んでいるのを、あの人、すごい真面目そうに話を聞いているじゃんとか、リタイアして恐らく大分年を取っていらっしゃるんだけど、一生懸命ノートを取っているじゃんとか、そういうのを見て、実は学んでいるんですね。そういうふうに、ほかの人が近くにいる。別に組織化されていなくても、同時に存在しているということが、ある種の学びの場を形成しているということ。

ですから、一人で学ぶというパターンと、仲間と一緒に学ぶというパターンと、3番目に教育機関、これは今日はちょっと置いておきますけれども、3つパターンがあって、一人あるいは仲間ということを入れたほしいんですが、実は、右側、仲間とともに学ぶというのは、これが社会教育なんですよ。

一人で学ぶ際の「学びのスタイル」というのは、幾つか書きましたけれども、情報の収集と発信、活動実践とか振り返り、仲間と学ぶ際は、同じく情報の収集と共有、対話とか議論とか共同作業、あと、振り返りというのが必要ですねということを行っていますけど、これははしょりますが、社会教育というのは、偉い講師の先生の話をお聴くというよりは、後でお話ししますけれども、みんなでわいわいがやがや、変な言い方なんですけど、他者が自分の近くに存在していて、他者と関わるということ、つくられているというか、つくることが社会教育なんです。

これは原理なんです。このことを理解しない人が、実は文科省の中にもいて、ちょっと困っているなと思うんですけど、社会教育の社会というのは何かというと、他者という意味なんです。他者と共同作業をする。いや、共同作業をしなくてもいい、ディスカッションをする。いや、ディスカッションもしなくてもいい、対話する。いや、対話もしなくてもいい、近くにいる、ちょっと見たり

するということが社会教育なんです。

それで、実は公民館は、もちろん御案内のとおり、公運審の人もいらっしゃいますけれども、公民館というのは1946年からあって、今、大体1万5,000館ぐらいあるんですけども、公民館とは何ぞや、公民館に関するリーフレットを作ろうということで、2008年に、日本の公民館を世界中の、特にアジアとかアフリカという、教育制度があまり発達していない国も含めて、そういうところに、公民館はいいですよということをPRしようという趣旨で、文科省が作ったんですね。

2008年当時、英語で作ったので、ローマ字で「K o m i n k a n」と書いてあるんですけど、これが世界中の人にすごい評判がよかったので、2009年にはその日本語版を、英語版が先にできて日本語版が後にできたんですが、それができた。そこに、公民館、どういう場というのを書いたんです。

インターネット上に載っていますから、公民館、リーフレットで調べると出てきますけれども、その一番初めのほうに、公民館の3つの機能みたいなものを書いてある。それは何かというと、集う場だ、それから、学ぶ場だ、つながる場だと書いてあるんですね。それで、先ほど言ったように集う場なんですね。

ですから、講座・セミナーというのは、これを言うと講座・セミナーの主催者に怒られちゃうんですけど、集うためのネタにすぎないと言っては怒られちゃうんですけど、ネタなんですよ。みんなが集って、もちろん、講師の先生の話もいろいろな意味を持つかもしれませんが、ほかの人の顔を見る、あるいは、知っている人に会ったら、おはようございますとか、面白かったですねとか、いや、つまらなかったですねとか、そういうことをやる場、集いというのはそういうことなんですね。他者を受け入れて、他者と明示的、あるいは暗示的にコミュニケーションする、そういう場をいうんですね。

だから、はっきり言うと、図書館は社会教育施設です。図書館は集う場なんですよ。博物館も集う場なんですよ。いやいや、本を借りる場で、本を借りることもそうなんだけど、それは講座・セミナーの講座内容、あるいは講師のそれと同じように、集うためのネタと言っても図書館の人は怒らないと思うけど、そういうネタで、行って、自分がこういうことに関心があるんだけど、司書の人がいたら、ちょっとお願い、植木をやろうかと思ってと言って地域のおじ

さんが来て、そういう話をして、植木の本ですか、うちはどういう本しかないんですけどというふうに言って、司書の人が本を持ってくる。

そうすると地域のおじさんは、これから植木を勉強して庭をきれいにしようというおじさんが、もっと写真が多いものはないかなと言うと、写真が多いものですか、ちょっとうちにはないから隣の何とか町の図書館だとあるかもというふうに、ちょっと調べましょかみたいな、これをレファレンスサービスといいますけれども、そういうふうに教えてあげるとか、そういうことなんですよ。

本を借りて読むこと自体は個人学習なんです。インフォーマルラーニング、個人学習なんですけれども、図書館の機能そのものは、集わせるということ、集ってコミュニケーションをさせる、そういう機能を持っているんですね。だから社会教育施設。

博物館も同じですよ。展示を見る、もちろん文化的な施設だと思えます。展示を見て、学芸員さんのレクチャーを聴く、それも博物館の活用の仕方ということは、特に今、メジャーな使い方だというのはよく分かりますが、博物館に行くと、いろんな人が来ているじゃん。いろんな人が集って、あそこの人たちは、この絵、すばらしいよねと言っているけど、俺はそんないい絵だと思わないとか、そういうふうに思っているんです。

つまり、集うということの意味ということで、とても大事なことなんですけれども、そういうふうに考えていくと、公民館の3つの役割、機能というのは、実は多かれ少なかれ、社会教育施設全般に言えるようなことなんですよ。

それは、もちろん図書館、博物館、公民館、あるいは地域によって、あるいは規模によって、いろんなものがありますが、集いの場である、人を集める場である、人がいろいろ学び合う場である、それから、人と人がつながる場であるということは、社会教育に関わるいろいろな施設全般に言えるのではないかなというふうに思うんですね。

それで、学校教育と社会教育の相違ということで、これは理屈っぽく説明するとどんどん時間がたってしまうんですけども、学校教育は、富国強兵というか、国家の意思と近代化政策の具体化として、学校を造って人材育成するんだという話になって、やってきたわけですが、とてもシステマチックです。

もちろん、我々みんな学校教育を通過しているから、朝何時に登校して、何時からホームルームで、給食は何時から何時までと、1日の日課も全部決まっている、すごいシステム化ですよ。だから、10月10日には、仕事でよく行きましたが、運動会、体育祭をやりまます。これも年間予定もばっちり決まっている。システムチックです。

システム化というのはどういうことかという、きちんと組織化されている。校長がいて、副校長がいて、組織化されている。もう一つ、きちんと計画化されているというのがシステム化なんですね。何月何日、この時間にこれをやりまますというのが決まっているんですね。

もう一つ大事なことは、学校教育というのは、ちょっと言葉がきついですけれども、半強制的な面があって、俺は行きたくないんだけどさ、行かないと単位が取れないからという話なんですよ。単位を取らせないぞというような、ある種プレッシャーをかけるんです。ちゃんと登校してくださいねと。日直とかありますから、君は日直なんだから、ちゃんとやらないと駄目ですよ。

子供は素直だから、は一いとなりますけれども、そういうふう、ある種のプレッシャーをかけたり、あるいはインセンティブという、誘発、誘引、これをやってくれたらこれをやるからというような誘引というところがあって、ある種のそういう枠組みをばしっと決めて、そこで学ばせるというのが学校教育なんですけれども、社会教育は、真逆なんですよ。論理としては真逆。もちろん学校教育に近いものもあるし、そういうものもあるんですけれども、真逆で、組織的な活動というのものもあるんだけど、あるいは計画的な活動というのものもあるんだけど、すごい緩やかで柔軟なんですね。ないに等しいと言ってもいいぐらいなんです。

例えば、グループ・サークル、これを集団学習というんだけど、グループ・サークルでいろいろな活動をしますよね。来週の金曜日の何時から、またここで練習しますと。日本舞踊でも、合唱でも何でもいいんですけど、今、実はフラダンスが人気の公民館、全国的には人気なんですけれども、例えばそういうものを練習しますということで、でも、あした台風が来るから、やめようぜみたいな話になることはよくあるんです。電車が人身事故で止まっちゃったから、今日はできないねということもある。そういう意味では、分かった、

しようがないよなという話になるんです。

そういうふうに、組織化されて計画化されていても、結構緩やかなものが社会教育、これが社会教育のよさなんですけれども、逆に言うと、ある種、プレッシャーがかからないから、嫌だったらすぐやめちゃうというか、つまんないからやめようとか忙しいからやめようとなっちゃうんですね、教育が。よさも悪さもあるんですが、学校教育とは真逆ということなんです。

大事なことは、社会教育というのは、そのベースにボランティア精神、ボランティアズムといいますけれども、それが、面白そうだから聞いてみよう、面白そうだからやってみよう、興味があるからギターの練習をしよう、こういうものを、興味とか動機ということで、意欲を持ってそれを実現していく、実践していく、ボランティアズムが基盤なんですね。

何度も言うけど、学校というのは、ボランティアズムじゃなくて、しようがないなという論理で、単位が必要だから休めないんだよなみたいな形で、大学生とかよくそういう人もいますけれども、そういうふうにある種のプレッシャーがあって、それに押されて何か学ぶという、もちろん自主的に学んでいる子もいますけれども、そういうのもあるということ。ですから、そういう違いがあるということですね。

これは、今言ったとおりです。社会教育には、下のほうになりますけれども、緩やかに組織化されて、ゆるゆるの計画化とかで、グループ・サークルで、ある種の組織化をされて、集団をつくっての集団学習、講座・セミナーとか研究会とか、名前は何でもいいんですけど、学習会とか、いろいろな人が集まって、特に施設とか、どこかの会議室を借りてやるような活動、これは集合学習とか集会学習という言い方があるんですけども、そういうふうにありますね。

だから、社会教育はいろいろな活動があるんだけど、大きく2つに分けると、集団型、もう一つは集合型、集会型というのが2つの柱としてあるんですけど、でも、どちらも、特に集合型のほうは組織化が、さっきも言いましたように、公民館の講座に来ましたと不特定多数の人が集まっていて、これは組織化された教育活動なんですよ。

組織なんかないじゃんと思うかもしれないけれども、同時に近くに存在している、つまり他者と接しているということは、ある種の

組織化として考えられているんですね。その辺が社会教育の面白さだし、ちょっと言い方が悪いけど、いいかげんさだというふうに思うんですけども、学校教育と比べてですけども、そういう面があるということです。

中身の話、教育内容とか学習内容の話です。これはモデル化されたもので、全部が全部そうではないんですけども、学校教育というのは、アカデミックな学術的な内容、学問的な内容を、普通教育とって、もう少し分かりやすくしたものが普通教育になっているんですね。授業というのは教室に、ちょっとこれは見づらいですね、指導案・正解・狙いとか全部、教師のイニシアチブで作りますね。教育する側にイニシアチブがある。

社会教育というのは、アカデミズムじゃなくて生活上の課題なんですよ。太陽系の惑星は幾つ分かかりますか。そういうのはアカデミックなんですけれども、例えば冥王星が今、準惑星になっているらしいんだけど、昔は水金地火木土天海冥と、冥王星が太陽系だということを僕も覚えていたんだけど、最近、冥王星は太陽系の惑星ではなくて準惑星ということで、すごいアカデミックな見解なんですけど、そういうことは学校で習うんですけど、実は、そんなことをやっても生活なんか全然よくなるじゃないというふうに、やっぱり生活のことを優先するんですよ、大人というのは。

だから、社会教育というのは、生活上困っていること、悩んでいること、あるいは、生活の中で、これをやってみたいなというようなことを実現するようなこと、これが社会教育のテーマで、我々は課題と言っていますけれども、それになるということなんです。

だから、課題をどんどん共有してって、おまえはそう思っているの、私はそう思っている、じゃ、課題を共有して、その課題の共有の輪が広がっていく、これを地域課題というふうにいうんですけども、一人一人の生活課題がいろんな人に共有される段階で、それは地域の課題ですよ。でも、その人の悩み事とか困り事とか、実現したいこととは別に、それが共有されて、いろいろな人が、みんなこれをやりましょうみたいな形で、これが地域の課題ということですね。

それが社会教育なので、その課題というものは、価値観が多様化していくと、私はこう思う、いやいや、俺はこう思う、全然課題が合わないじゃんということもあったりするんですよ。本当に合う

課題が少なくなっているなど。昔はみんな、一億総中流じゃないけれども、みんな豊かになりましょうみたいなものが暗黙の了解で、社会全体の課題、地域の課題でもあったと思うんですけども、そういうのがなくなっちゃって、個々ばらばらになっていて、課題の共有が進められていないということになります。そういった違いがあるんですね。

学校教育は一律ですから、アカデミックなことは真理だから、普遍的な価値を持っているものだから、覚えなさい、理解しなさい、みんな同じようにということで、社会教育は、人によっていろいろ違うことを、たまたま何か課題を共有して、この5人のグループで研究しましょうかみたいなことなんですね。だから、アドホックといいますけど、本当にいい意味で、その場限りのものが社会教育の学びだというふうに思います。ちょっと見つらくなってすみません。

社会教育の特徴を踏まえた社会教育行政の特徴。ちなみに、社会教育、社会教育と言っていますけど、普通は、社会教育の活動と社会教育の行政を一緒くたで社会教育と言っている人が多いですよ。でも、理屈っぽく言えば、我々自身が当事者として行う社会教育の活動と小金井市のいろいろな部局の社会教育行政と、分けて考える必要があるんですけども、社会教育行政の特徴というか、求められているものというのはやっぱり公共的なので、だって、グループ・サークルとか、あるいは講座・セミナーというのは山ほどありますよね。

今、マージャン教室がはやっているというけど、健康にいいとか、ありますけれども、一昔前、僕も相談を受けたことがあって、マージャン教室はやってもいいんでしょうかとある自治体の人から言われてつい、えーっ、マージャンですかと言っちゃったんですね。囲碁、将棋はよくて何でマージャンは駄目なんだと言われて、そう言われると、でも、あまり深入りすると余計なことになるから言わないですけど、そういうのがあって、だから、無限にあるんですよ、社会教育の活動というのは。講座・セミナーも無限にあるし、いろいろグループ・サークルも無限にある。

その中で、これは公共だ、すごい地域に役立つ。みんな役立つんですよ、多かれ少なかれ。でも、これは公共性が高いというところに、やっぱり社会教育行政は着目する必要があるし、もう一つは、活動の内容まで踏み込まないで、条件整備だけしましょうよと。1

950年代以降の社会教育行政の施策の柱というのは、そういう条件整備だったんですね。

もう一つは右側で、学ぶプロセスと言いますが、社会教育というのは無限にあって、いろんなことがあるんですけども、学ぶプロセスというのはとても大事です。だってそれは、成績、テストなんかできないわけですからね、いろいろなことで。マージャンがどのぐらいまくなりましたかなんて、テストして分かるのかな。よく分からないけど、そういうことなんだと思うんですね。

社会教育のもうちょっと原理的な話をすると、仲間と一緒にやるという話をしました。ちょっと飛ばしましたが、また元に戻りますが、社会教育の本質というものがあって、仲間とともに関わり合うことと書いていますけれども、関わり合うというのがとても大事なんですね。

ちょっとこっちのほうを使おうかな。社会参加から社会教育実践までのプロセス、他者と接する、仲間とともに、一言で言いますが、いろんな段階があって、仲間かどうか分からないけど、他者と接する。話をしていくうち、対話していくうちに、仲間になってくるんですね。情報交流をして仲間になっていって、仲間と学び合ったり、教え合ったりする。これが4番目です。5番目は、今度一緒にやりましょうかと何か実践する。これが社会教育の、他者と接してから共同で実践するまでのモデル的なフローチャートなんですね。

それで、これはどういうことかという、情報をゲットして、あそこのラーメンうまいんですねとか今度行ってみましょう、それもあつた種の情報のゲットなんです。情報を教えてもらっている。そのときに、教えてくれる人が先生なんです。教わる私は生徒、学生なんですね。ところが、社会教育の場合は、それがくるくる変わるんですよ。教えられたり、学び合ってくるから。

例えば、今年はサンマが不漁だと魚屋が言っていた。公民館で何か議論していて、今年、サンマが不漁なんだよね、高くてねというので、なかなか手に入らなくて、魚屋ですが、でも、今、ブリがとてもいい、たくさん取れておいしいんだよと。ブリの話聞いて、今度は八百屋のおばちゃんが、ブリはこの野菜と付け合わせて煮物にするとおいしいんですねという話を、その話を聞いて、料理の得意な主婦の人が、そうそう、ブリの何とかの煮つけはこうい

うふうにやるとすごくおいしくなるんだよと。

分かりますか、その都度、先生役が替わっているでしょう。魚屋が先生であり、その次に八百屋が先生であり、その次に料理の得意な奥さんが先生で、これが社会教育なんですね。学校の場合は、先生が固定化されている。理科の先生、何とか先生と決まっているんですよ。でも、社会教育の場合は、対等な立場でこうやって議論するわけだから、先生役がころころ替わるんです。

しかも、情報を教えてやるだけじゃなくて、いろいろ議論していると、受け取ったほうは気がつく。気づき、アウェアネスというんですが、気づきを得るということです。そう言われれば、あの人の言っていることもそうだよなと思うこともあるわけです。また逆に、そうはいっても、やっぱり俺の考えが正しいなというふうに思い直すこともあるわけです。

そのプロセスそのものが社会教育、気づき合ったり、気づかせ合ったり、あるいは、教え合ったり、教えられ合ったり、あるいは、何かみんなと一緒につくったりするとか、このプロセスが社会教育ですが、社会教育ほどプロセスが大事なものはない。そのプロセスを、すごい建設的に、プロダクティブに、あるいは、それぞれの成長、発達というか、それぞれがより豊かに生きていくために、成長、発達するために、プロセスに介入して、ああしたらどうですか、こうしたらどうですか、そこまでやったら、ちょっと雑談なんかやめましょうというのは、社会教育専門職なんですね。

さっきの司書じゃないけれども、今、社会教育士という資格ができましたけれども、学びのプロセスで、先生役と生徒役がころころ替わります。気づきの場合もあるし、情報の単なる提供の場合もあるから、それが脱線しないように、それが実り多きものになるように、調整するとかファシリテートするのが社会教育専門職、場合によってはアドバイスもする。そういうのが社会教育専門職員、だから、プロセスはすごく大事なもので、ちょっと元に戻りますが、こういうことを御理解ください。

公共的な事柄に重点を置くということ、税金を使って社会教育行政をするわけだから、当たり前のことだと思いますが、その中でも、条件整備ですね。社会教育は自由な活動で、自分たちの自発性、ボランティアズムに基づいて行う活動だから、条件はしっかり整備してあげて、あとは自由に使ってください、やってくださいというのが

社会教育行政の仕事なんですね。

学ぶプロセスが、教育と言われるゆえんという、教育的意義を持つわけだから、それが豊かになるように、ファシリテートやコーディネートというものは必要ですよというのが、社会教育の原点ですね。社会教育行政に求められること。

古典的なのというか、1950年代に成立した社会教育行政の手法というのは、大きく3本柱で、真ん中の施設の整備、公民館、図書館を整備しましょう。それから、社会教育関係団体というものを育成しましょう。青年団、婦人会を含めて、地域でいろいろなものがあり、育成しましょう。3、左側は、社会教育事業というものをちゃんと展開して、皆さんにきちんと学ぶ機会、学ぶ場を提供しましょう。

この3本柱でいって、上のほうに、社会教育主事など専門職員によるサポートとありますけど、これが、それぞれの事業とか、あるいは公民館、図書館とか、あるいは、いろんな社会教育関係団体が活動しているプロセスに社会教育主事の専門職員が介入して、よりよいものにするという構造なんですね。

ただ、これは地域を基盤としているんですよ。地域というものが崩れてくると、この3本柱も崩れる。土台みたいなもので、実際に日本の地域は、1950年代と比べるとずっと崩れっ放し、ちょっと怒られちゃうけど、そういうことなんですね。

実は、50年代の社会教育のモデルというのは、人が移動しない社会というものを念頭に置いてつくられたものなんですね。農村共同体型という地縁・血縁で、人がずっと定住していて動かないから、地縁・血縁ができるわけですよ。

僕は千葉県の生まれなんですけれども、中学校の同級生に農家の人がすごく多くて、今でも同窓会をやると、俺はまだ農業をやっているんだと。お嫁さんは自分の町とか近隣からもらって、自分の子供は地元の小学校、中学校、高校ぐらい出たら農業をやるとか、人によっては東京に出てきて、サービス業に就く人もいますけれども、つまり、なかなか動かないんですよ。つまり、生産の場と消費の場がそこで一致しているということだと思う。

つまり、そういうところに公民館を造る、図書館を造る、社会教育の活動をやりましょう、そういうところで青年団をつくる、婦人会をつくる、動かないからみんなメンバーは同じで、仲よくなるわ

けですよ。

ところが、高度経済成長、その後の安定成長とか、バブル経済が崩壊して、その後、ずっとこれまで日本経済も停滞したままなんですけれども、つまり、農村共同体型モデルで社会教育というのが出来上がったのにもかかわらず、みんな移動したんですね、高度経済成長のときに。つまり、過疎と過密。

工業というのは沿岸部に立地しますよね。京浜工業地帯とか、あるいは中京、阪神、北九州、四大工業地帯、みんな海岸沿いで、だから、そこに工場とか造るわけだから、みんなそこに行っちゃうんですね。金の卵とって、上の人たちなんかは中卒でそういうところに、そっちのほうの方がもうかるから、お金、所得が多いから、農業をやっているよりもずっといい。そうすると、みんな移動したんですね。

それで、過疎と過密の問題が起きる。農村はすかすかになるんですね。だから、働き手もいなくなっちゃう。おじいちゃん、おばあちゃんばかりになっちゃうケースもあるわけですし、それが、高度経済成長のときに人口移動が起きて、都市は都市で、満員電車とか過密の問題がすごく起こったんですね。

その後の安定成長なんかの状況は、少しは改善されましたけど、変わって、その後、サービス産業化が入ってくると、工業化からサービス産業化になって、人口が集まる場所にサービス産業は立地するんですよ。人がたくさん集まるから、スターバックスを造って、コーヒーが売れるんですよ。クリーニング屋だって、人が集まるからクリーニング屋は繁盛する。

人がすかすかだったら、人が集まらないので、鳥取県で何年か前に、スタバの第1号ができたという有名な話なんですけど、鳥取県知事が、うちの県は田舎だからというのを皮肉って、スタバはないけど砂場があると言った人がいましたけれども、要するに、人口が過密のところ立地する。過密のところになれば、コーヒー1杯、高めだけど、たくさん売ればもうかるから、立地してももうかるということですよ。いないと、1日に10個ぐらしかコーヒーが売れなかったら、スタバを造ってももうからないから、造らないようにしようということなんですよ。

それは何を意味しているかということ、人口が集中するところにサービス産業は立地して、サービス産業が立地すると利便性が高まる

から、さらに人口が集まる。これが東京一極集中の原理なんですけれども、つまり何を言いたいかというと、農村である程度人口がばらけていたのが、工業化やサービス産業化によって、どんどん東京に集中してきた、大都市に集中してきたということなんだろうなと思います。

ところが、バブル経済で崩壊してしまったわけで、このままでいいんだろうかとみんな考えたわけですよ。そのときに、人口集中の根源的な要因というのは、要するに、たくさん所得を欲しいとか利便性の高いところで生活したいというのが、都市に集まる人間の欲求の根源的なところだと思うんですけども、そのようなことをやってきたのが、バブル経済の崩壊でぐっと挫折してしまうんですね。

そのときに、私たちはこのままで本当に幸せになれるのかしらということです。このまま、お金もうけというか、そればかり追求していったら本当にいいんだろうかみたいな話になって、お金もうけを追求した結果、バブル経済になって、それがポシャってしまって、本当にそれ以降、そういう状況になるわけです。

90年代の終わり頃から、地域づくりとか地域の活性化とか、盛んに言われるようになりました。あるいは生活第一とか、もっと地に足がついた生活をしたほうがいいのではないと言われるようになってきて、それが21世紀になって、ずっと言われ続けてきている。それは日本経済が停滞していることの象徴かとも見えますけれども、そういう状況になってきているわけですね。

ですから、日本の社会変動というか、人口移動というか、農村社会としてずっとやってきたところが、人口移動ですごい工業化され、産業化で都市に結びついていったら、そこでうまくいくかなと思ったら、バブル経済が崩壊して、すごく混迷、混乱しているような時代になっているんじゃないかなというふうに思います。

それはいいんですけど、それよりも大事なことは、社会教育というのは農村モデルなので、農村共同体モデルで出来上がっているわけだから、それが、人がいなくなっちゃったら、公民館は人が集まりません、図書館は人が来ません、講座をやっても人が来ませんとなっちゃうんですよ。

それで、都会は都会で、いろんな人が集まっても、絆というか、つながりはありません。俺は九州だ、私は北海道だ、俺は長野だ、

でも、地縁・血縁じゃないから、あなた誰ですかみたいなの、都会は都会でつながりが無い、乏しい。田舎は田舎で、これまでのつながりが壊されちゃっている。それが、仲間と一緒にするような社会教育で、仲間がいないとか、仲間になかなかないというのが今の状況だというふうに思います。

ちょっと、社会教育行政の年代というか、時代時代のことを念頭に置いて、その図にしたものですけども、これは省略します。

社会教育施設の目的とか機能。今日はいろいろな社会教育の施設の方々が中心になって集まっていると思いますけども、公民館、公運審の人たちに申し訳ないんですけども、僕もある自治体で公運審の委員をやっていますけども、やっぱり若い人が来ないよねという……。

図書館、博物館は結構、設置の数も微増しているし、利用者の数も増えているんですけども、公民館はようやく微減が止まったぐらいなのかなと思うし、社会教育主事の採用数に至ってはどんどん減っている。つまり、公民館がちょっと衰退ぎみで、図書館や博物館は元気があるよねというのが、今の社会教育調査とかを見るとそういう状況になっています。

何でそうなのかということです。いろいろな理由があると思いますが、私の見立てでは、図書館や博物館というのは、個人利用が可能なのか、個人利用を念頭に置いた施設なんですよね。公民館は、もちろん個人でも使えますよ。でも、団体利用を念頭に置いています。そこじゃないかなと思っているんですけども。

その中で、孤立とか孤独というものがあって、特に大都市というのは、今の若い人にも言うんですけども、孤立・孤独というのは職場とか生活の場でも、いろいろなところでなってしまう。若い人は、学生たちはそうだねと共感してくれるんですけど、そういう状況にあるんですよということなんです。

その中で、ではグループで利用してくださいと、公民館で団体利用をやっても、若い人はみんなばらばらになっているわけで、団体で行かないですよ。既にある団体が登録して利用するというのが公民館なんです。

ところが、図書館や博物館というのは、個人利用を念頭に置かれているから、自分の行きたいときに行ってもいいし、行けばいろんな人たちがいて、そういう人を見ているのも楽しいよねみたいな、そ

ういうのが合っているんですね。

私は、個の時代と言っているんですけども、個人主義という、人々がよくも悪くもばらばらになって、個性、個人というものがすごい際立つ時代になってきているなというふうに思うんですね。社会全体としては今、ちょっと停滞ぎみだというのが認識です。

あともう少しで終わります。

今の流行で、ICTと、それから、最初に申し上げたようにコロナという、2大事件、トレンドというものがあって、いろいろ課題に直面しているんだろうと思うんですけども、日本社会のフェーズ、局面としては、ちょっとここを読みますが、キャッチアップ型の目標、つまり、近代化でずっと百何十年もやってきたキャッチアップ型の目標というものが、あまり意味を持たなくなってしまって、国家というけど、むしろ今のSDGsなんていうのは、地球規模の課題ですね。こういったグローバルな課題が、国、地域、我々の生活空間の中に下りてきているというのが今の状況だと思います。

それから、ヒト・モノ・情報の移動性（モビリティ）がすごく拡大してきて、だから、関係性、人間関係というか、コミュニケーションとかそういうものが、濃い薄いはあったとしても、アメリカ人とメールで交歓したり、もっと言うと、中国の人とネットでゲームができたり、そのようなことになっていますね。

それから、デジタル化・バーチャル化が日進月歩で進んでいて、チャットGPTなんか、去年の今頃はなかったのが急に広がってきて、大きな話題になっている。そういう、特にICTの問題ですね。

下のほうは、個人のフェーズでは何が問題か、これはそうじゃない人もいると思いますが、一般的に言えば、目的的な生き方自体への疑義・再検討が必要になっているということですね。今まで日本人は目的的な生き方をしてきたんですね。いい会社に入るためにいい大学に入っています。ある種の目的的な生き方ですね。学歴社会を構成する、まず、教育の経験、教育の履歴というものがシステム化されちゃっているというところがあると思います。それで本当にいいのというのを改めて今の時代、考えられているんだろうなというふうに思います。

上昇志向の否定と生活充実志向というのは、特に今の若い世代というのはほとんど上昇志向がないんですね。出世という言葉の意味を分かっているのかなと、そのぐらい上昇志向がないんですね。む

しろ、自分の気に入った人と一緒に暮らして、共稼ぎで、そんな年収1,000万もなくてもいいから、400万、500万でもいいから、2人合わせれば結構いいお金になるから、そういうふうにして暮らしていくというのを志向している学生がすごく多い。

それから、分断・孤立、先ほど申し上げたように、特にこれは社会教育といっても、かなり決定的な問題だと思いますけれども、それが拡大して行って、別に若い人だけじゃないですよ。子育て中のお母さんもそうですし、あるいは、今、後期高齢と言わないけど、65歳以上のおじいちゃん、おばあちゃんなんかも、すごく孤独になっている人が多いんですよ。その中で、つながりが消える。田舎に行けば、何とかの会とか、おじいちゃんだけの会とか、おじいちゃん、おばあちゃんが集まる会とかあります。それはまさに社会教育の活動でやっているんだけど、都会の人はそんなのなくて分からないよというのがあるんです。

こういうものが、今の日本が直面する課題だというふうに思うんです。

ちょっと戻りまして、でも、これが実はコロナで、また大きく変わったというか、これをさらに促進したんじゃないかなというふうに思うんですね。

その中で、社会教育の本質、原理的なものというのは、ほかの人と対等な関係性に基づいて、関わり合う、やり取り、これが社会教育だと思うし、関わり合うことによってお互いが、私も、あなたも、それがあなたも、みんなが成長、発達する。実はそれが、地域にどんどんそういう人が増えていけば、人が育っているわけですよ。これは地域づくりにつながったわけですよ。

それから、社会教育の中身としては、知識を得たり、気づきを得たり、自分で価値を創ったりする活動をするということなんです。

最後のものは、私の独断と偏見で、また、世の中が変わることによって変わるかもしれませんが、ちょっと私案というか、見ていただきたいと思うんですが、コロナによって何が変わるだろう。

学ぶという目的が、すごく個別化するのではないか。つながりの規模や形がマイクロ化、つまり、10人で集まっていた団体がもっと、三、四人に減っちゃったりするというか、興味・関心が細分化というか、つながりそのものが個人主義的になるので、細分化していくんじゃないかなと。

それから、メディアを通してバーチャルな関わり合いの普及に伴い、情報の収集・編集・発信の方法が変わる。これは、特に情報発信が、今のSNSでもそうなんですけれども、個人がマスコミになったように情報発信できちゃうんですね。それによっていろいろメリットもデメリットも出てくる。

3番目は、対等の関係性というものがいろいろなところで求められていく。もともと情報化によって、メールというのは、上下関係を飛ばして、僕は玉川大学の一特任教授ですけれども、私が学長に直接メールを書くことができちゃうんです。部長とか飛ばしちゃって、教授とか飛ばしちゃってというのができちゃったりするんですね。そういう意味では、フラットな関係性というのできる。だからこそ、そこに信頼関係みたいものが大事になってくるんじゃないかなと思うんですね。

課題のありようが総合的でありながら多元的・個別的・選択的になるということで、これは一見、課題がばらばらになってというか、価値観が多様化しているから、なかなか課題を共有できないよという時代になっているんですけれども、でも、それはグローバルに見れば、同じような課題じゃん。例えば環境問題、地球温暖化なんというのは同じような課題じゃんということで、それがSDGsとかになってきて、考えてみれば、グローバルには共有できる課題があって、それで自分の身になって考えたときに、あなたは何ができますかという、SDGsだと思いますけれども、そういうふうに課題の在り方が変わっているということなんだと思います。

それから、孤立・孤独がどんどん進行しているということで、他者と関わるための場とか接点というのがとても大事で、今、居場所論というのが盛んですけれども、これは高齢者の方の居場所論もあるし、若い人の居場所論もある。居場所なんて全然、社会教育と関係ないじゃん、いや、関係が少しはあるんです、こういうふうに。

1) のところは居場所なんですよ。他者と接するというのは居場所だから、自分もある程度フリーにして、何かほっとできて、自分を開放して、コミュニケーションできる、これが居場所なので、それは社会教育の活動そのものではないんですが、そこから3番、4番、5番みたく、徐々に社会教育活動が成熟していくわけだから、人とまず接するということがとても大事で、そういうことがなかなか起こり得ないので、まず、居場所がとても大事だというような議

論があると思います。

そういうことで、コロナ禍で、これは私の独断と偏見なので、皆さんの考える材料にしてほしいんですが、若干長引いちゃいましたけど、こういう方向で進んでいるんじゃないのかなというのが私の考えなんです。

それで、戻りますけれども、皆さんにちょっと考えてほしいのは、そういった中で、社会教育の活動というのはどういう方向になっていくのか。別にこれは、行政に反映させたいと思うので、社会教育の活動がこうなっていくから、社会教育行政もこうなったほうがいいじゃんみたいなことなんです。

社会教育行政の枠組みというのは今、ここに示したとおりですね。施設を造って、それを条件整備で、ちゃんとそういう場として機能するようにする。いろんな社会教育関係団体がありますよね。それを、グループ・サークルも含めて、社会教育事業というのがもちろんあるんですけど、こういったことをこれまでやってきて、これからもある程度やっていくことになると思いますけれども、これからのポストコロナ社会で、どういう社会教育活動が盛んになるんですかね。

それはいろんなケースがあると思いますけれども、図書館はこういう使われ方をするんじゃないですかね、博物館ではこういう展示が人気が出てくるんじゃないですかね、公民館はこういうことが今、望まれているんじゃないですかね、別に施設じゃなくても、社会教育関係団体というのはこういうふうになったほうがいいんじゃないですかね、いろいろあると思います。それをある程度、具体的に示していただきたいなと思っています。

よろしいですか。ちょっと電気をつけてもらっていいですか。

これは現在進行中の話で、こうだなんて言い切ることはできないと思いますけれども、皆さん方の知恵で、こういう活動は大事じゃないか、こういう活動がどんどん広がってくるんじゃないか、そこまでいいです。だから行政はこういうところに重点を当ててということになるんですが、後者のほうはいいですから、どういう活動が盛んになってくるんですか。

それを各グループで、まず、個人でちょっと考えていただいて、3つぐらい、もっと多くてもいいけど、こういう活動が大事になる、それをお考えいただいて、メモか何かで書いていただきたいと思

ます。

では、お願いします。個人で、まず、相談しないで考えてみてください。お願いします。

三浦生涯学習課長 先生、一回ここで休憩でもよろしいですか。

笹井議長 そうですね。ごめんなさい、ちょっと休憩します。忘れていた。

三浦生涯学習課長 それでは、皆さんすみません、長い間ありがとうございました。

私の手元の時計で今、14時51分でございますので、14時55分ぐらいまで、トイレ休憩をさせていただきます。どうぞ皆さん、しばらく御休憩ください。よろしく願いいたします。

(休 憩)

三浦生涯学習課長 それでは、再開させていただきます。よろしく願いいたします。

この後、各グループで、まず、進行役、ファシリテーターをお決めください。特に2期目、3期目の委員の方々は積極的にお引き受けいただきますよう、お願いを申し上げます。

また、グループ内で出された御意見につきまして、大体1グループ二、三分を目安に、発表していただきたいと思っております。併せて発表者もお決めください。各グループで、ファシリテーターと発表する方、お一人ずつお決めください。

それが決まりましたら、「ポストコロナ社会における社会教育活動の具体化に向けて」ということで、先ほど先生からお話がありましたとおり、切り口は、施設側とか団体側という形でも結構でございますので、皆様御議論をいただいて、どんなところが課題として浮き上がってくるのかというところにつきまして、発表をお願いできればと思っております。

何か御質問等々はございますか。

小林（浩）委員 全体で何分ぐらいですか。

三浦生涯学習課長 大変恐縮なんですけれども、この会場が、一番長くても4時に

は撤収しなくてはならないものですから、3時半の終了時刻は厳守したいと思っております。したがって、議論につきましては、各班15分程度を目安にと考えてございます。

小林（浩）委員 結構急がないと。

三浦生涯学習課長 すみません。今、ちょうど3時でございますので、14時57分でございますので、3時15分ぐらいを目安にと思っております。よろしくお願いをいたします。申し訳ありません。

では、あの時計で3時15分ぐらいまで、皆様、各班に分かれてディスカッションをお願いいたします。よろしくお願いをいたします。

（グループディスカッション）

三浦生涯学習課長 それでは、皆さん、時間が短くて消化不良な部分があったら申し訳なく存じます。これから発表のほうに移らせていただきますので、準備をよろしくお願いをいたします。

1番から、1グループ、2グループ、3グループ、4グループの順で行かせていただきまして、4グループまで終わった段階で、先生から一定講評をいただければと思っております。

では、第1グループの方、よろしくお願いいたします。どちらでも結構でございます。

伊藤委員 第1グループ、社会教育委員の伊藤と申します。

短い時間ですが、とても濃い話合いができたと思います。いろいろお話が出た中で、やっぱりつながりということをお大事にするというのは、すごい大事だよということが出ました。

公民館であったり図書館であったりというのが今、なかなかいい企画を出しても人が集まらない。それは、子供たちを中心に多様化がとて進んでいるというところで、いい企画を出しても、そこに引っかかる人がいないみたいなこともあるんじゃないかというような話が出てきました。

あとは、例えばWi-Fiを入れるとかそういうことも、場所の充実も大事だし、場所だけじゃなくて、公民館という機能ももっと充実して行って、例えばSNSであったりですとか、発信の仕方と

か、人と人をつなげる仕組みづくりみたいなどころというのも、今後、やっていけることはいろいろあるんじゃないかなというような話が出ました。

というところで……。

小林（浩）委員 あと、公民館とかそれだけじゃなくて、さっき出た、小学校とちょっとつなげていくとか、多世代でいろいろつなげていくことがあると、やっぱりつなげるということがむちゃくちゃ大事だなというのは皆さん口をそろえておっしゃっていたので、それが共通項になるんですね。

伊藤委員 そうですね。

三浦生涯学習課長 ありがとうございます。（拍手）
では、第2グループの方、よろしいでしょうか。

白井委員 図書館協議会、白井と申します。

第2グループでもいろんな意見が出ましたけど、非常に時間が短いので、それぞれの方から、自分の視点から、どんなところにこれからの社会教育の方向を考えるかというのを、ポイントを出していただきました。

それを並べますと、一つは、私自身ですけれども、企業の経験がありますので、企業人から見て、これから人生100年時代、一つの単線路線のキャリアというのがあって、何回もキャリアをやり直していかなくてはいけない。そういうときに、リスクリングというのがこれから絶対必要になってきます。そういうときに、学校教育ではない、社会教育の場が非常に必要になってくる。それに適したものを持っていくことが必要であろう。

もう一つは、別の方から、公民館の立場として見て、もっとこれからは公民館というものが、今まで言われていた公民館、例えば、先生は団体中心の活動である公民館と言われるけれども、そうじゃなくて個人の活動もあるんだよ。もっとダイナミックな視点で、そういう運用をしていかなければいけないという意見。

また、コロナ禍でいろんなことが変わってきた。でも、逆に変わらないこともあるんじゃないか。みんなそれぞれ人は生きていくわ

けですし、それから、人とのつながりというのは、これまでも大事だったし、これからも大事である。そういう変わらないということにも着目していくべきだという意見もございました。

また、社会教育を見たときに、我々大体みんな年配者なんですけれども、若い世代というのを見たときに、やはり全然考え方が違う、あるいはやっていることも違う、SNSやいろんなコミュニケーションを通して、我々が想像しないような活動をしている。そういったことに対して、我々自身が追いついていないんじゃないか。だから、若い世代を育てるという観点から、社会教育の活動というのを見直していくべきではないかという意見。

最後に出ましたのが、とはいえ社会教育というのは、やはり一番基本はリアルな体験、対面での体験が基本である。対面でリアルな場を設けるとするのが一番大事であろうというのが、意見として出ました。

そういったいろんな意見が出たんですけれども、最後に、少しまとめることとしては、我々図書館とか公民館は、いろんな活動をやっているんだけど、これは役割が違うんだけど、クロスオーバーしているところがあるから、垣根をなくして、共同していろんな施設を利用する、あるいは活動を共同でやっていくということが、これから最も必要なことなんじゃないかということになりました。

以上です。

三浦生涯学習課長 ありがとうございます。(拍手)

では、3グループの方、お願いします。

坂野委員

第3グループでございます。社会教育委員の坂野でございます。

あまりまとまっていないんですけれども、まず、問題意識として上がった一つの点は、みんなの間に、若者に限りませんが、地域社会、あるいはコミュニティというものに対する自覚やアイデンティティーの希薄化が進んでいて、それを行政がまとまって回復していくのが必要ということであって、いろいろと方策がある中で一つには、複合施設というようなものを造っていくのはどうかということです。

その中で、やはり求められるのが居場所づくりなんですけど、物理

的な居場所プラス心の居場所というものが必要だろうということです。つまり、何か相談できる場所ということです。

そういう観点から見たときに、図書館、博物館、それから、公民館の三者がありますけれども、それ以外にも市長部局にいろいろな施設があって、例えばほかの地域では何とかセンターという充実したものがありますが、まずは行政の中で横断的な連携をしていただくことです。これは教育委員会、これは市長部局というふうにはばらばらにいかないで、やはり一緒に動いてもらうということが必要なのではないかなということです。

具体的に言うと、面白い意見として私が思ったのは、学校ですと今、いろいろな事件が起きたため卒業生が自由に入ってくることはできません。これを何とかして、例えば中学校に卒業生が自分のボランティア活動で戻っていけるならそれなりの居場所となるものが自分でも見つけることができる、そういうことができればいいなという意見があったのが、非常に面白かったと思います。

それから、ほかの班でも上がっていますけれども、そうはいつでも小金井市は金がないので新しい施設はできませんとあっさり諦めるんですけれども、新施設でなく、みんなが集まってくるという充実した機能を持たせるのが我々三者トライアングルのコーディネートの役割ではないかなということです。

なお、この三者での会合は、私が昔いたときは、もう一回、計年2回集まる時期があったと思うんですね。今日は有給だと思いますけれども、無給でもう一回集まる懇親会というのが次回あるはずで、できれば今年もそういうものを開催していただいて、少しでも三者の意見交換の場を多くつくっていただければよろしいかと思えます。

以上です。

三浦生涯学習課長 ありがとうございます。(拍手)

4番の方、お願いいたします。

福井委員

4グループ、公民館の福井と申します。

コロナの時期はどうであったかということで、コロナ前とどう違うがあったかということです。皆さん御存じのとおり、オンラ

インの復活ということで、学校も一部オンラインの授業を、また、企業のほうはオンラインで会議をするということで、オンラインの使い方ということも、例えば公民館としては、オンラインでつなぐ、講座をやっているのは各個人がまた見られるということで、ある程度、オンラインの利用ということも一つ、公民館を含めて考えなければいけないんじゃないかというのと、あと、当然、メリット、デメリットがあるんですけども、オンライン利用の企業の場合は、勤務者が家にいたということで、家族の時間が増えたというようなメリットがあるようなことも言われています。

また、全てのイベントが中止になりました。図書館でも、机の利用のところも、一つずつ間引いた格好しか、座れなかったり、あと、学校の場合は、小学校とかというのは体育館全体での合同の訓話というものは一切なくなった。

あと、中学校3年間で、遠足は全て行くことができなかったということで、この時代の人とのつながりが少なくなったということで、できたら今後、社会教育委員としては、個から人とのつながりということも、もう少し復活したほうがいいんじゃないかということで、いろいろ取り組み方があるんですけども、人と地域をつなぐというためには、サロンとか地域のイベントに参加するというのもあると思いますが、社会教育委員としては、従来のコロナ前の時代プラスアルファの仕掛けになるところに協力していけばいいのではないかとということで話し合いました。

以上です。

三浦生涯学習課長 ありがとうございました。(拍手)

では、先生、1グループから4グループまでの発表を伺っていたでいて、何か講評があれば、よろしく願いいたします。

笹井議長

ありがとうございました。すみません、しゃべり過ぎちゃって、テンションが上がり過ぎちゃって、時間がなくて申し訳ありません。

正直、このテーマをつくるときに、皆さんどういうふうに反応されるのかなとちょっと不安だったんですけども、すごい真正面から捉えていただいて、真剣に考えていただいて、とてもうれしく思います。

今、いただいている話を全部メモして、また情報共有ができたと

いうことが、これからのいろいろな意味でプラスになのかなというふうに思います。

日進月歩なんですよ、情報化の話も。コロナも治ったかなと思ったら、また最近、増えているみたいな話になって、その辺がよく分からなくて、すごく不安定な時代になっていますけれども、地域をつくるとか、人間がよりよいキャリアを、もっと言うと、よりよい人生を歩むために、社会教育や生涯学習は絶対必要だと思っているので、それぞれの立場で知恵を絞って、課長さんがいるので申し訳ないんだけど、施設があまりよくないという話もありますが、それを乗り越える知恵を出して、うまくやっていただけたらなというふうに思います。

以上です。ありがとうございました。

三浦生涯学習課長 ありがとうございました。(拍手)

それでは、本日御講演をいただきました笹井先生に、もう一度大きな拍手をお願いいたします。

(拍 手)

三浦生涯学習課長 タイムキーパーが不慣れなもので、大変申し訳ございませんでした。若干消化不良のところもありますけれども、3時半、定刻をもって終了とさせていただきます。

本日は御参加いただきまして、ありがとうございました。

— 了 —